

コーパスに基づく日本語の文法形式の使用傾向の記述 —「大きい・な」「小さい・な」の使い分けについて—

劉 善鈺

1. はじめに

日本語の連体修飾成分の中には、「大きい・大きな」「おかしい・おかしい」「真っ白い・真っ白な」など、同じ語幹に語尾として「い」と「な」の両形が付くものがある。この二つの形式の間には、下記のような最小対が観察される。

例1) 父の大きい背中／父の大きな背中

例2) 小さい家／小さな家

本研究は連体修飾成分を研究対象とし、上記の例のように、同一の語幹が「い」を従える場合を「イ形修飾語」と呼び、「な」を従える場合を「ナ形修飾語」と呼ぶ。また、それぞれを「イ形」、「ナ形」と省略することもある。

これらのイ形修飾語とナ形修飾語の対は、品詞は異なっても（形容詞 vs 連体詞、形容詞 vs 形容動詞）、後続する名詞を修飾する機能を持つという共通点がある。イとナを置換しても意味に変わらない場合（例 3）を参照）もあるが、置換すると容認度が下がったり、不自然に感じられる場合（例 4）を参照）もある。

例3) 約 300m 離れたビル内で仕事をしていた男性会社員は、「10 時半頃、ドーンと大きい{大きな}音が 1、2 回した。窓の外を見たら空港の方から煙が上がっていた。何が起こったのかと事務所内が騒然とした」と話した。【毎日新聞】

例4) 重大問題となると、総督の意向が大きな{?大きい}影響を現してくる。かつて

…総督は首を縦に振らず、ついに運動は立ち消えになった。【新潮文庫】

このように、これらの対は、一見同じように使用できるかのように見えて、同じとは言えない場合があると考えられる。日本語学習者はこのような差異を正確に学習することは難しい。本研究では、この差異を明示的に記述することを試みる。

2. 先行研究及びその問題点

日本語の形容詞には、数多くの研究が存在する(山田(1908)、橋本(1934)、西尾(1972)、鈴木・林(1973)、樋口(1996)など)。そして、連体修飾についての研究も数が多い(川端(1959)、高橋(1963,1965)、奥津(1974,2004)など)。また、形容詞の連体修飾に関しても多く議論されている。しかし、イ形とナ形の両方が可能な連体修飾語に関する先行研究は多くない。そのうち、重要なのは、森田(1977)、柴田(1982)、飛田・浅田(1991)、三枝(1996)の4つである。

森田(1977:118)は、「名詞に係る場合、抽象名詞(『事件、成功、責任』など)には連体詞『大きな』を用いるのが普通であるのに対して、『大きい』は具体的な事物(『家、人、町』など)に使うことが多い。」と述べている。

柴田(1982:143)は、「小さい」と「小さな」、「大きい」と「大きな」を比べながら意味分析を行っており、「大きな・小さなは、単に抽象的なものというのではなく、<物理的の大小が言えない>ようなものである」と指摘している。また、「連体修飾節の中の述語には『小さな』が来にくい。」と主張している。

飛田・浅田(1991:97)は「『大きな』『小さな』は、『大きい』『小さい』の名詞を修飾する用法に、ほぼ似たような意味で用いられる語で、『大きい』『小さい』に比べると意味の幅が狭く、具体的な大小についての意味で用いられることが多い。」と述べている。

三枝(1996:99)は、「名詞を修飾する場合には『な形』を『い形』の倍近く用いている」と述べているほか、「『な形』はいわゆる名詞に接続するが、『い形』は形式名詞に接続することが多い」、「『な形』は物理的な大小だけでなく、心理的な大きさを表す」と指摘している。

この4つの先行研究のうち、森田(1977)と飛田・浅田(1991)の主張は異なってお

り、イ形とナ形と、一体どちらのほうが具体的事物、あるいは具体的大小について修飾する傾向が強いかについては一貫していない。また、柴田(1982)の主張も議論の余地がある。なぜなら、「大きな体、大きな手、小さな町、小さな家」などが単なる物理的大小を表すことはよくあるからである。また、三枝(1996)が指摘している、「『な形』を『い形』の倍近く用いている」という傾向は、どのような場合でも当てはまるかどうか検証が必要と思われる。

3. 本研究

3.1 研究対象

イ形とナ形を両方持つペアは多数存在するが(「細かい・細かな」「意地悪い・意地悪な」など)、本論文では先行研究で最も議論の多い、「大きい・大きな」と「小さい・小さな」の2組を研究対象として取り上げる。この2組は「形容詞 vs 連体詞」のペアであり、連体修飾用法には他の「暖かい・暖かな」「柔らかい・柔らかな」のような「形容詞 vs 形容動詞」のペアとは異なった性質を持つ可能性が想定できる。

3.2 研究目的と研究方法

本論文の目的は、「大きい・大きな」「小さい・小さな」の2組の語の連体修飾用法における使用特徴を明らかにすることである。方法として、日本語母語話者の使用傾向を次の3種類のコーパスにおいて調査する。

- A) 『毎日新聞記事データ集』(新聞データ): 『毎日新聞』1999年と2007年の2年分。以降『毎日新聞』と略記。
- B) 『CD-ROM 新潮文庫の100冊』(小説データ): 1950年以後の作品で、翻訳作品を除いたものを使用する。以降『新潮文庫』と略記。
- C) 『名大会話コーパス』(話し言葉データ): 2名から4名の話者による約100時間の雑談を収録、文字化したデータ。以降『名大会話』と略記。

イ形とナ形の使用に影響を与える要因として仮定したのは、①コーパスの種類、②連体修飾の構造、③被修飾名詞の特徴、の3つである。

3.3 用例の抽出

まず、UNIX 環境において grep コマンドを用いて、『毎日新聞』『新潮文庫』『名大会話』の 3 つのコーパスから、「大きい・大きな」「小さい・小さな」が含まれる文を網羅的に抽出する。それから、Windows 環境において、抽出した用例を、テキストエディターを用いて整形を施し、表計算ソフト上に貼り付ける。

次に、手作業で、抽出した用例を、「連体」用法か「述語」用法かの 2 種類に分ける。例えば、「…全体の売上高に占める比率は小さい。」の中の「小さい」は「述語」用法とし、「…信号を待ちながら大きな欠伸をした。」の中の「大きな」は「連体」用法とする。

最後に、述語用法を排除し、更に、非連体修飾用法の用例も除外して、連体修飾用法の用例のみから成る本論文の研究対象用例のデータベースを構成する。

4. 分析と考察

ここでは、コーパスから抽出した、「大きい・大きな」「小さい・小さな」が含まれる連体修飾の用例(20,526 例)について分析を行う。3.2 に挙げた 3 つの観点:①各コーパス別の使用傾向、②連体修飾構造別の使用傾向、③被修飾名詞の特徴から、イ形とナ形の使用を見る。

4.1 各コーパス別の使用傾向

本節では、イ形とナ形のコーパス別の使用傾向に関して検討する。

本調査で使用する 3 つのコーパス『毎日新聞』『新潮文庫』『名大会話』は、それぞれ新聞データコーパス、小説データコーパス、会話データコーパスであるが、大きく「書き言葉コーパス」と「話し言葉コーパス」に分類できる。『毎日新聞』『新潮文庫』は「書き言葉コーパス」であり、『名大会話』は「話し言葉コーパス」である。ここから、イ形とナ形の「書き言葉コーパス」と「話し言葉コーパス」における使用傾向の相違について検討する。

図 1 と図 2 の棒グラフは、「大きい・大きな」と「小さい・小さな」の、3 つのコーパスにおける出現頻度の割合を示したものである。出現頻度の実数は、図の下の表に

表示した。

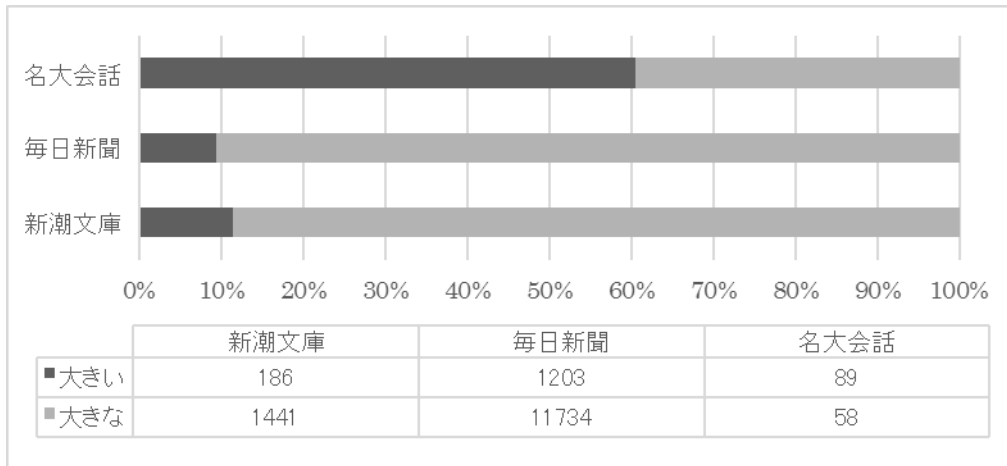


図1 コーパス別に見られる「大きい・大きな」の使用傾向

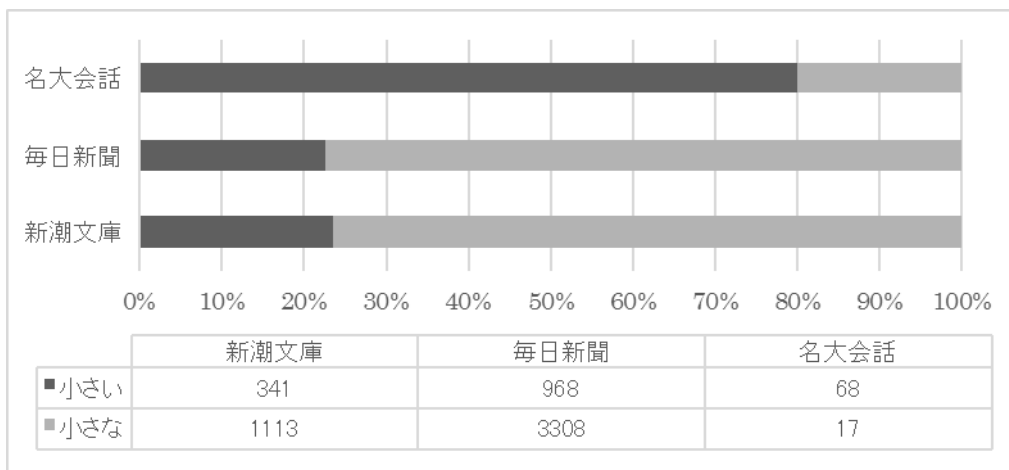


図2 コーパス別に見られる「小さい・小さな」の使用傾向

図1と図2を比較すると、「大きい・大きな」「小さい・小さな」の両者には類似した使用傾向が観察される。2組の語はいずれも、話し言葉コーパスの『名大会話』においてはナ形よりイ形のほうが多く使われ、書き言葉コーパス『新潮文庫』と『毎日新聞』においては反対に、ナ形はイ形より多く用いられる傾向を示している。

例5)～例7)がその例である。これらは3例とも同一の名詞「声」を修飾しているが、『名大会話』ではイ形が使われ、『毎日新聞』と『新潮文庫』ではナ形が使われている。

例5) その、ささやくところから大きい声で歌わなきゃなんない。【名大会話】

例6) オープニング曲は行進曲「秋空に」。「ドレミの歌」などでは子供たちが体でリズムをとり、大きな声で歌った。さらに即興で「だんご3兄弟」を演奏すると子供たちは大喜びだった。【毎日新聞】

例7) エディは私の耳元で、あんたが運をつれてるのよ、と囁き、それから大きな声で皆に言った。【新潮文庫】

以上のように、今回のコーパスを利用した調査では、書き言葉においてはナ形が多く用いられ、話し言葉においてはイ形が多く用いられていることが明らかになった。三枝(1996:99)は「名詞を修飾する場合には『な形』を『い形』の倍近く用いている」と指摘しているが、今回の調査を踏まえた上でより厳密に述べると、書き言葉において名詞を修飾する場合にはナ形をイ形より圧倒的に多く用いている、ということになるだろう。

4.2 連体修飾の構造別の使用傾向

本節では、3つのコーパスから収集した20,526例のデータを、連体修飾の構造の特徴により、「直接修飾」、「間接修飾」、「主語付き」という3種類に分類する。例えば、「…すみにいる小さなアリを指して…」のように修飾語「小さな」の直後に被修飾語「アリ」がくる場合を「直接修飾」とし、「大きな黒いアゲハ」などのように修飾語「大きな」と被修飾語「アゲハ」の間に他の修飾成分が介入している場合を「間接修飾」とし、「体の大きいお相撲さんが…」のように、修飾語「大きい」とその前にくる名詞「体」とが「修飾語節」を形成し、一体となつてうしろの名詞を修飾する場合を「主語付き」とした。構造分け作業の次に、それぞれの構造におけるイ形とナ形の出現頻度の集計を提示する。

図3と図4の棒グラフは、連体修飾の構造を「直接修飾」「間接修飾」「主語付き」の3つに分けた場合のイ形とナ形の出現の割合を示したものである。図の下の方の表は出現頻度の実数である。

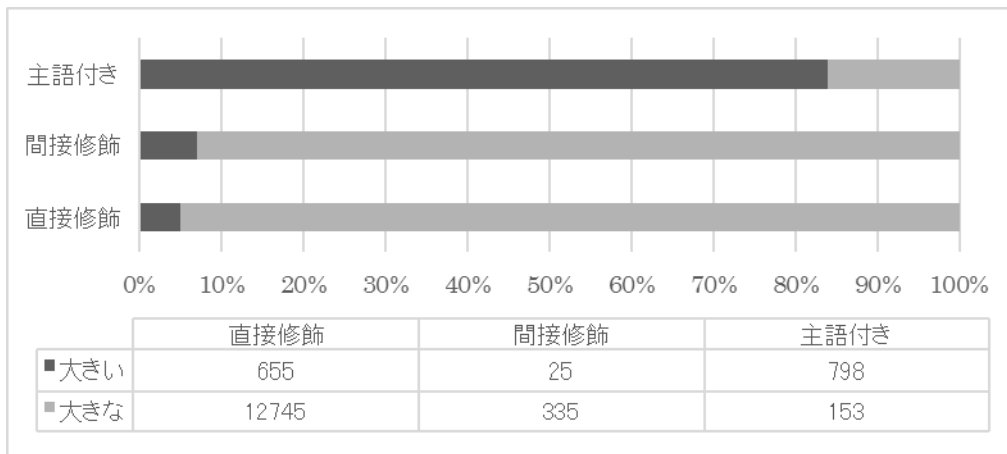


図 3 連体修飾構造における「大きい」と「大きな」の使用傾向

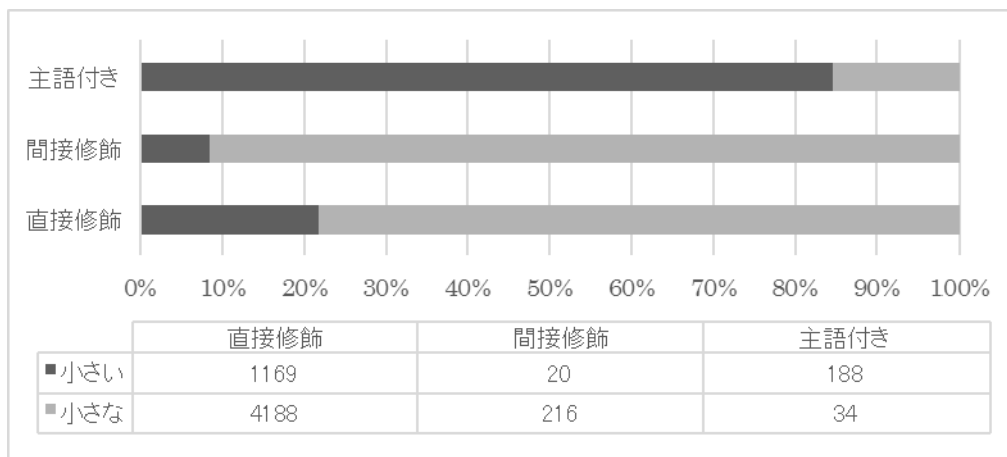


図 4 連体修飾構造における「小さい」と「小さな」の使用傾向

図 3 と図 4 に見られるように、「主語付き」構造の連体修飾用法におけるイ形とナ形の使用傾向は「直接修飾」構造及び「間接修飾」構造の場合と大きく異なることがわかる。「大きい・大きな」「小さい・小さな」の 2 組の語は、「主語付き」構造の連体修飾用法において、いずれもイ形がナ形より多く用いられている。

「主語付き」構造の連体修飾用法は、修飾語とそれに先行する主語が「修飾節」を形成して後ろの名詞を修飾するため、当該修飾語はそれに先行する主語との関係では、述語用法となる。この結果は、「連体修飾の中のイ形とナ形が述語用法である場合イ形が用いられることが多い」という柴田(1982)の主張を支持する。下の例 8)と例 9)はその実例である。

例8) 「今夏は酷暑」という…身体を「見せる」ための服が定着すると予感した。そして下着メーカーがストラップをとってもラクにつけられて、胸元のくりが大きいブラジャーを売り出したときに、予感は確信に変わった。…【毎日新聞】

例9) こうした主要都市だけでなく、規模の小さい都市でも、都市再生などに取り組む地域で地価が上昇するケースも現れた。【毎日新聞】

4.3 被修飾名詞の特徴

本節では、先行研究に対する検証ならびに、被修飾名詞がそれぞれどのように用いられているかを解明するため、被修飾名詞の意味領域を大きな意味的まとまりとして5つの部門¹⁾に分類した。

また、一言で「連体修飾」と言っても、修飾語は、その直後あるいはそれより後ろの位置にくる名詞、いわゆる被修飾名詞を修飾する場合(例えば、「大きい影響」「小さな家具のキズ」など)と、その前に来る名詞、いわゆる連体修飾節の主語の属性を述べ立てる場合(例えば、「目の大きな少女」「規模が小さい企業」など)がある。すなわち、前者は本研究でいう「直接修飾」構造と「間接修飾」構造、後者は「主語付き」構造となる。「主語付き」構造の連体修飾は、形式上は修飾語の後ろに被修飾名詞を持つが、実際の指し示す意味内容は、それに先行する名詞(主語)の属性であるため、「直接修飾」「間接修飾」とは用法が異なる。

したがって、本節では、「主語付き」構造を除いた「直接修飾」「間接修飾」(合せて「非主語付き」と呼ぶ)構造の被修飾名詞のみを検討する。まず、イ形・ナ形の使用傾向を各分類部門ごとに検討し、次に、被修飾名詞そのものを観察する。

4.3.1 被修飾名詞の分類に見られる特徴

表1は、「非主語付き」構造における、「大きい・大きな」「小さい・小さな」の2組

¹⁾ 5つの部門は『分類語彙表』(国立国語研究所、2004)により、下記の通りに定め、各々の被修飾名詞は、この語彙表を検索して、そこに記載されている部門通りに分類した。なお、語彙表にない語の場合、類語の分類から、筆者が類推した。

- 1) 「抽象的關係」(例えば、「形」、「違い」、「影響」、「転回」、「枠組み」など)
- 2) 「人間活動の主体」(例えば、「子供」、「私」、「学校」、「労働組合」、「国」など)
- 3) 「人間活動—精神および行為」(例えば、「心配」、「人柄」、「政策」、「対話」など)
- 4) 「生産物および用具」(例えば、「袋」、「茶わん」、「車」、「布団」、「部屋」など)
- 5) 「自然物および自然現象」(例えば、「雨」、「川」、「顔」、「楠木」、「蜂」など)

の語の被修飾名詞を5つの部門に分類した結果である。

表1 「非主語付き」構造における被修飾名詞の分類結果

	自然物および 自然現象	人間活動 の主体	人間活動—精神 および行為	生産物 および用具	抽象的 関係	総計
小さい	144	241	78	113	613	1189
小さな	866	1265	785	914	574	4404
大きい	93	70	96	107	314	680
大きな	1313	386	5101	1154	5126	13080
総計	2416	1962	6060	2288	6627	19353

(注:各分類結果は『毎日新聞』『新潮文庫』『名大会話』3つのコーパスにおける出現頻度の合計である)

また、図5は表1をもとに作成したグラフであり、「非主語付き構造」における「大きな」と「小さな」が各分類部門全体に占める割合を表す。「大きな」の割合は、各分類部門における「大きい」と「大きな」両形の合計頻度に占める比率であり、「小さな」の割合は、各分類部門における「小さい」と「小さな」両形の合計頻度に占める比率である。

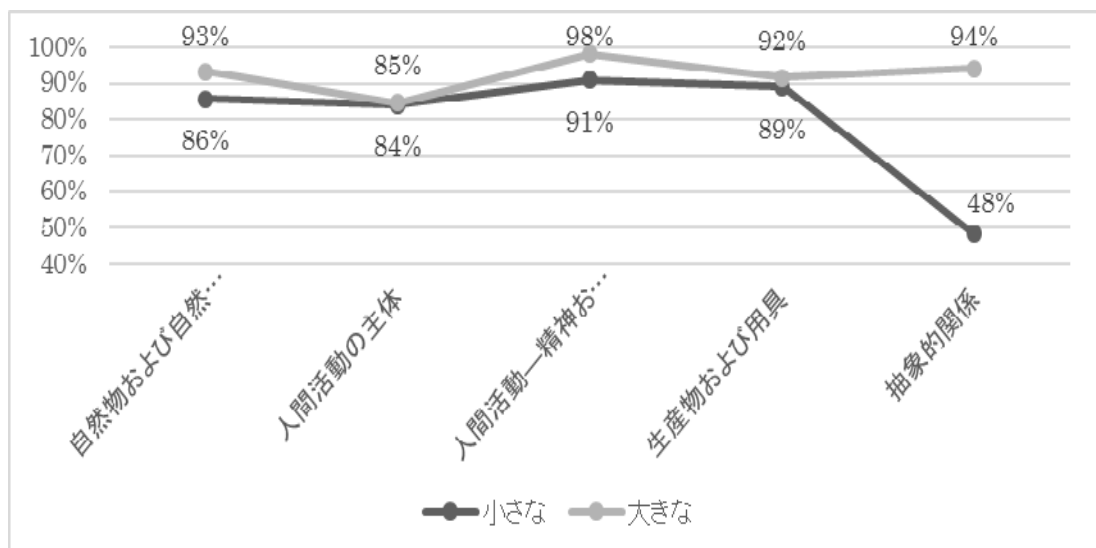


図5 被修飾名詞の分類に見た2組の語のナ形の割合
 (「非主語付き」構造の場合)

図 5 に示されるように、「大きい・大きな」に関しては、どの分類部門においても、イ形よりナ形のほうが圧倒的に多く用いられている。一方、「小さい・小さな」に関しては、「抽象的關係」の名詞を修飾する場合、イ形のほうがナ形より多く用いられている（「小さな」48% vs 「小さい」52%）。「抽象的關係」以外の分類部門においての使用傾向は、「大きい・大きな」と共通し、いずれもイ形よりナ形のほうが多く用いられている。

以上の分析から、「抽象的關係」の名詞を修飾する場合、「大きい・大きな」と「小さい・小さな」の使用傾向が異なっていることがわかる。すなわち、「大きい」より「大きな」のほうが、「小さな」より「小さい」のほうが抽象的關係の名詞と結びつきやすいと思われる。例 10)と例 11)はその実例である。

例10) ほぼ間違いがない目安は「1通のメールへの添付は1メガバイトまで。デジカメの写真なら1枚まで」と吉田さん。複数枚の写真など大きなサイズのデータを送りたい場合は「宅ふぁいる便」のような、無料のファイル受け渡しサービスを利用したい。【毎日新聞】

例11) オリンパス光学は、最高の画質性能を持つ一眼レフデジタルカメラを9月15日に発売する。…また、小さいサイズの画像でも250万画素の情報量を生かし、滑らかに表現する新たな処理技術も採用した。【毎日新聞】

例 10)と例 11)はいずれも、『毎日新聞』から抽出した実例で、同一の「抽象的關係」名詞を修飾するにもかかわらず、例 10)では「大きい」ではなく「大きな」が使われ、例 11)では「小さな」ではなく「小さい」が使われている。

このことから、イ形とナ形の選ばれ方は修飾語の種類、すなわち、「大きい、大きな」なのか「小さな、小さな」なのかによっても変わる場合があると言えるだろう。

4.3.2 「大きい」「大きな」が修飾する名詞

表 2 は、「非主語付き」構造における「大きい」「大きな」両形の被修飾名詞を出現頻度上位 30 位まで並べたものである。

表2 「大きい」「大きな」の被修飾名詞(上位30位)

順位	被修飾名詞	大きい	大きな	総計	順位	被修飾名詞	大きい	大きな	総計
1	影響	1	586	587	16	打撃	0	119	119
2	声	21	389	410	17	テーマ	0	117	117
3	問題	3	323	326	18	音	4	110	114
4	被害	2	299	301	19	理由	4	96	100
5	課題	1	231	232	20	の	86	10	96
6	変化	1	192	193	21	影響力	0	93	93
7	役割	0	179	179	22	こと	41	50	91
8	要因	0	176	176	23	原因	0	88	88
9	もの	56	113	169	24	成果	0	87	87
10	力	1	158	159	25	期待	0	87	87
11	拍手	2	150	152	26	負担	0	85	85
12	意味	6	134	140	27	衝撃	1	84	85
13	違い	0	130	130	28	反響	0	84	84
14	流れ	4	123	127	29	混乱	0	84	84
15	差	1	121	122	30	特徴	0	83	83

表2から、「大きな」に続く名詞で上位に来るのは抽象名詞²が多いことが分かる。イ形出現頻度「0」の語(「役割」「要因」「違い」「打撃」「テーマ」「影響力」「原因」「成果」「期待」「負担」「反響」「混乱」「特徴」)はすべて抽象名詞である。また、「影響」「問題」「被害」「課題」「変化」「力」「拍手」「意味」「流れ」「差」「理由」「衝撃」などの抽象名詞はナ形だけではなく、イ形に修飾される場合もあるが、ナ形に修飾される頻度が圧倒的に高い。

実際、例12)～例14)に見られるように、イ形は抽象名詞に接続しにくい。

² 本論文で「抽象名詞」「具象名詞」と呼ぶものは、『日本語文法大辞典』(2001:466)の定める「抽象名詞」「具象名詞」を指す。すなわち、「抽象名詞」は抽象的概念を表す名詞で、「平和・憎悪・勤勉」など。「具象名詞」は具体的な事物を表す名詞で、「鉛筆・雨傘・大根」など。

例12) 「佐山憲一は、こんどの××省事件の重要な参考人だったのです。彼は課長補佐といっても、長い間、実務にたずさわってきた男で、行政事務には明るいのです。したがって、こんどの事件にも大きな{?大きい}役割を演じています。その点では、参考人というよりも被疑者に近い…」【新潮文庫】

例13) 豊中市消防本部の119番通報覚知は午前2時9分で、消火開始はその4分後。出火から消火開始まで約30分かかった計算になり、大惨事を招いた大きな{?大きい}要因につながったと言えそうだ。【毎日新聞】

例14) (うん)うちだってさー、何かでもまあ、AとEちゃんの間にも大きな{?大きい}違いがあるからさー、<笑い>***て感じ。【名大会話】

一方、「非主語付き」連体修飾構造であるにもかかわらず、「大きい」に続く名詞には、形式名詞³が多い(「の」86例、「もの」56例、「こと」41例)。例15)～例20)はその実例である。

例15) …と太郎は内心思う。速くなるのは練習もあるけれど、それより、もっと大きいのは素質であることはわかり切っている。それだけに胸がツライのである。【新潮文庫】

例16) マンションだと、やっぱちょっと大きいのはね、大変ね、うーん。【名大会話】

例17) ハドロサウルス科の恐竜は草食で、大きいものは全長10～15メートルになる。カモノハシに似た口が特徴。同県益城町砥川の富田優司さん(51)が04年に、御船町の山中の沢で発見した。【毎日新聞】

例18) 作ってしまえば、こちらのものである。巨城を背景にすれば、国中への発言権は、今までとは比べものにならぬほど大きいものになるであろう。【新潮文庫】

例19) それってほんとは大きいことだなんて(そうなんだ)思って。【名大会話】

例20) デメリットというより、カルチャーが違うところが一緒になるのは大変だ。また、従業員が1対1で重なっただけでは何のメリットもない。大きいことはいいことじゃない。【毎日新聞】

³ 『日本語文法大辞典』(2001:776)によると、「形式名詞」とは、一定の実質的な概念がなく、意味を補足するために、それを修飾する語句を必要とするものである。「こと」「もの」「はず」「ため」など。

4.3.3 「小さい」「小さな」が修飾する名詞

表 3 は、「非主語付き」構造における「小さい」「小さな」両形の被修飾名詞を出現頻度上位 30 位まで並べたものである。

表 3 「小さい」「小さな」の被修飾名詞(上位 30 位)

順位	被修飾名詞	小さい	小さな	総計	順位	被修飾名詞	小さい	小さな	総計
1	ころ	248	16	264	16	島	3	45	48
2	とき	183	4	187	17	命	3	42	45
3	子供	52	91	143	18	手	2	40	42
4	声	22	115	137	19	花	4	36	40
5	町	4	122	126	20	童話	0	38	38
6	政府	13	103	116	21	会社	4	34	38
7	こと	31	51	82	22	親切	0	37	37
8	体	15	63	78	23	の	31	2	33
9	子	43	28	71	24	文字	1	26	27
10	旅	0	70	70	25	国	1	21	22
11	家	5	62	67	26	顔	4	18	22
12	店	4	59	63	27	音	2	19	21
13	村	7	48	55	28	姫君	13	7	20
14	もの	15	38	53	29	虫	2	18	20
15	穴	2	48	50	30	女の子	2	18	20

表 3 から、時を表す名詞「ころ」「とき」の前には「小さい」がよく用いられることが分かる(例 21)と例 22)を参照)。例 21)と例 22)は、ナ形を取ることも可能であるが、実際には、ほとんどイ形を取っている。

例21) 芳古堂は表具と経師とで、格も高く、手堅いので知られていた。…したがって、八人いる職人たちの躰もきびしく、みな子飼いかから育てられ、読み書きはも

もちろん、生け花、茶の湯までひとつお習わされ、書画のよしあしなども、小さいころから実物について教えられた。【新潮文庫】

例22) 家庭や学校で倫理観や正義感を教えなくてはいけない。基本的には小さいときのしつけこそ大切で、今一度家庭で見直す必要があるのではないか。文部大臣として、しつけの重要性を国民の皆さんに呼びかけることも考えたい。
【毎日新聞】

また、「小さい」「小さな」に修飾される名詞のうち、このほかに上位に多いのは具象名詞（「子供」「町」「政府」「体」「家」「店」など）である。これらの具象名詞を修飾するときにはイ形よりもナ形が多く用いられているし、イ形の出現頻度「0」の語には抽象名詞（「旅」「童話」「親切」など）が圧倒的に多い。したがって、具象名詞、抽象名詞いずれの場合もナ形のほうがよく用いられると言える。これは 4.3.1 節で分析した、「抽象的關係」の名詞を修飾する場合には「小さい」が「小さな」より多い、という結果（図 5 を参照）と異なる。この結果は、「抽象的關係」という被修飾名詞の分類部門には時間を表す名詞及び形式名詞（「小さい」と共起しやすい「ころ」、「とき」、「の」など）が含まれており、その頻度が極めて高いことに由来すると考えられる。従って、述べ語数ではなく異なり語数で検討するならば、「小さい」と「抽象的關係」の共起傾向が高いという結果にはならない可能性もあり、今後の検討課題としたい。

「小さい」と「小さな」の 2 語に関して、類似した文脈における同一の名詞を修飾するイ形とナ形を比較すると、具象名詞であろうと、抽象名詞であろうと、被修飾名詞が文脈において、客観的な大きさ、具体的な大きさ、物理的な大きさを問題にする場合はイ形が用いられ、被修飾名詞が文脈において、主観的な大きさ、抽象的な大きさ、心理的な大きさを問題にする場合はナ形が用いられることが分かる。例 23) と例 24) は「小さい」と「小さな」が同一の名詞を修飾する実例である。

例23) そのコーヒー店は、みたところ猥雑をきわめた街の生活の集積のあいだからこちらをにらんでいる邪悪な眼の球に似ていた。黒ずんだ木ぎれをよせあつめてできあがった鳥籠のように小さい店で、その名は知らない。【新潮文庫】

例24) 後に料理界としては初めて文化功労者に選ばれる湯木貞一氏(故人)が1930年、30歳の時に大阪・新町(大阪市西区)に開いた料理屋「吉兆」が原点。最初は10人の客が入っていっぱいになる小さな店で、鯛(たい)茶漬(1人前85銭)が看板料理だった。【毎日新聞】

例23)の「小さい店」では、「鳥籠のように」という比喩で示されるとおり、物理的、客観的な大きさが問題になっているのに対し、例24)の「小さな店」では物理的な「小ささ」というより、小規模な店であることが表され、現在の成功との対比が示されている。

5. おわりに

本論文では、『毎日新聞』『新潮文庫』『名大会話』から抽出した実例に基づき、「大きい・大きな」「小さい・小さな」の2組の連体修飾語句の使用特徴を観察した。

分析の結果、以下の4点が明らかになった。①書き言葉においてはナ形が多く用いられる一方、話し言葉においてはイ形が多く用いられ、レジスターによる違いがある。②「主語付き」連体修飾構造の場合、イ形がナ形より多く用いられ、イ形は述語性が高いと考えられる。③「非主語付き」連体修飾構造においては、被修飾名詞によってイ形とナ形の使われやすさが異なる。ナ形は抽象名詞に係る場合に多く用いられるのに対して、イ形は形式名詞を修飾することが多い。④イ形は物理的な大きさを表し、ナ形は心理的な大きさを表すことが多い。

レジスターによる使い方の差異は、先行研究には全く触れられていない新しい発見である。話し言葉においてイ形がナ形より多く用いられるのは、イ形とナ形がもつ歴史的背景に起因すると思われる。イ形形容詞は日本語の土着語に由来するのに対し、ナ形は「～なり」という形で文書に用いられる形式であった。そのため、現代に至っても話し言葉に多く使われるのはイ形であり、ナ形は好まれない傾向があるのではないかと考えられる。詳細については今後の研究課題としたい。

「主語付き」連体修飾構造でナ形が用いられにくいのは、ナ形が連体詞であることと関連があると思われる。イ形とナ形がどのような被修飾名詞と共起しやすいかについては、森田(1977)の「抽象名詞(「事件、成功、責任」など)には連体詞を用い

るのが普通である」という主張が支持されるが、なぜそうなのかについてはさらに考察を続けたい。

イ形とナ形を両方持つペアは他にも多数存在するので、これらの用法についても今後観察を行って、今回の結果がどれほど一般化できるかを検証したい。

[参考文献]

- 奥津敬一郎(1974)『生成日本文法論一名詞句の構造一』大修館書店
- 奥津敬一郎(2004)「連体修飾とは何か」『日本語学』23(3), pp.6-16, 明治書院
- 川端善明(1959)「連体(一)」『国語国文』28-10, pp.31-48, 京都大学国文学会
- 国立国語研究所編(2004)『分類語彙表(増補改訂版)』国立国語研究所資料集
14,独立行政法人国立国語研究所
- 三枝令子(1996)「『小さな旅』と『小さい旅』」『言語文化』33, pp.97-108, 一橋大
学語学研究室
- 柴田武(1982)「チイサイ・チイサナ、オオキイ・オオキナ」『ことばの意味3—辞書に
書いてないこと』國廣哲彌他編, pp.138-145, 平凡社
- 鈴木一彦・林巨樹編(1973)『形容詞・形容動詞』明治書院(日本文法講座 4)
- 高橋太郎(1963)「動詞の連体修飾法」『ことばの研究』 pp.169-182, 国立国語研
究所論集, 秀英出版
- 高橋太郎(1965)「動詞の連体修飾法(2)」『ことばの研究2』 pp.39-62, 国立国語
研究所論集2, 秀英出版
- 西尾寅弥(1972)『形容詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版
- 橋本進吉(1934)『国語法要説』明治書院(『国語法研究』岩波書店 1948 所収)
- 樋口文彦(1996)「形容詞の分類—状態形容詞と質形容詞」『ことばの科学7』
pp.39-60, 言語学研究会編, むぎ書房
- 飛田良文・浅田秀子(1991)『現代形容詞用法辞典』東京堂出版
- 森田良行(1977)『基礎日本語辞典』角田小辞典 7, 角川書店
- 山口明穂・秋本守英編(2001)『日本語文法大辞典』明治書院
- 山田孝雄(1908)『日本文法論』宝文館